

みつくら

令和 3年 9月15日 第346号
 発行 大瀬川活性化会議
 編集 「みつくら」編集委員会
 花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
 大瀬川振興センター 電話45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

花の茎数は1万3千本

大瀬川の環境保全を目的に活動している葛丸の農村環境を守る会(板垣幸夫会長、構成員235世帯372名)では、今回初めて大瀬川自生花菖蒲園の花茎数調査を8月5日と6日の2日間行った。

調査を行ったのは板垣幸夫さん、畠山松五郎さん、菅原純一さん、菅原得之さんの4人で、調査範囲は事前に南北66mを3等分、東西88mを22等分した66区画(1区画の広さは22m×4m)とした。この範囲は、概ね花菖蒲が有る南側と、北側の旧道路までの四方形を対象にしたために、湿地ではない部分も含まれる。1区画当たり最も花茎数の多かったのは、令和2年に野点の会を開いた場所から40m北の付近で668本を数えた。ちなみに最も少ない所は湿地ではないところの0本で16区画有った。花菖蒲が生えている区画で最も少ないのは5本(これは普通に見ただけでは1本も生えていないように見える)。区画毎の花の茎の数を合計すると実に13,198本あった。

1本の花茎には自生花菖蒲園では平均1,5ヶの花が咲いたので、花の数は19,797ヶが咲いた事になる。もっとも咲き始めから花が散る迄の数で、一斉に2万ヶが咲いた訳ではないが・・・。

健康福祉課が出前の健康指導

去る8月10日、熊谷律夫さん宅に花巻市健康福祉課の職員2名が訪れて45分間個別の健康指導を行った。熊谷さんが選ばれた理由は6月の健康診断の結果、身長に対して体重が低すぎたための指導との事。熊谷さんに「軽いといってるが何Kgなの?」と聞いたところ「あの時は44Kgだったが、今は2Kg増えたよ」とのこと。身長からの標準体重は60Kg前後なので、確かに軽いと思われる。

市から訪問日の通知があったので、「どうして家まで来てくれるの?」と聞いたところ、職員からは「熊谷さんに百歳以上も元気でいてほしいからですよ」と返答があった。当日は、食事は大事なので何をどれだけ食べたかや体重を記録す

る用紙を渡された。他にもお口のケアや、脳トレの方法、軽体操の継続方法を丁寧に教えて頂いたと言う。

失礼だが、最初は今流行の詐欺かと思った。今回のことででも戸別訪問の健康指導を行っていることを改めて知った。

親子でゴミ拾い

大瀬川子供育成会では、8月13日の早朝に子供達と父兄が大瀬川運動公園を目指しながらゴミ拾いを行った。参加者は7区13名、8区17名、9区10名合わせて40名であった。だいぶ前の週刊誌であったが、ゴミを道端に捨てたり、キャンプなどで後始末をしない人を調査したところ、子供も大人もゴミ拾いに参加しないか、または参加してもいやいやながら拾った人が多かったと書いてあった。子供達も自分で拾うという事で、社会道徳が身に付く事であろう。

体協がラジオ体操会

大瀬川体育協会(熊谷俊哉会長)主催のラジオ体操会は、8月13日の午前6時半から大瀬川運動公園で53名が参加して開かれた。熊谷会長は「子供さん方は夏休み中ですが、怪我のないように過ごしていますか?コロナで家にいがちですが、ラジオ体操で元気になりましょう」と挨拶された。参加した方々は、体操台で見本を示した板垣雄一さんを見習って元気に身体を動かしていた。

8区に熊が出没

8月26日の雨上がりの朝、菅原得之さんが自宅そばの畑の中に大きな熊の足跡が35もあるのを発見!!。足跡を辿ると東側の水田から畑を通り、成映工務店作業場へと続いていた。

今度は北側の足跡を、熊が来たと思われる方向に辿ってみると、板垣美智子さんの畑から来たものであった。更に同じ足跡が、熊谷賢良さんの田んぼへと続き、熊谷キヌヨさんの畑から来たことが判明した。熊谷キヌヨさんから熊谷賢良さん宅への移動の際は、舗装道路に熊の泥足跡がくっきり残っていたので大きさを測った結果、横幅が12,8cm、親指からかかとまでが17,8cmだった。

ネットで検索したところ、足の大きさから熊の体長と体重が判るといので(実際の足の大きさは、足跡から5%差し引いた数字とのこと)計算した結果、体長は140cm、体重は160kgと判明し、とても大きな熊だと推定された。野原地区での熊出沒は平成30年7月10日に板垣匡俊さんの畑で目撃されて以来である。

2回目の早朝一斉草刈りを実施 -葛丸の農村環境を守る会-

去る9月4日に葛丸の農村環境を守る会(板垣幸夫会長、構成員235世帯372名)では、今年2回目となる早朝一斉草刈りを行った。

場所は、千鳥苑入り口・薬師堂川の東家の南橋と薬師堂川の菅原新一朗宅南側・ふれあい運動公園入口の4ヶ所で総勢84

名がそれぞれの場所に朝5時半集合、約1時間半ほどで終了した。

この作業に参加された方々には、草刈り替刃と飲み物が出されている

みんなで草刈り作業 -下大瀬川美土里の会-

同じく9月4日に下大瀬川美土里の会(高橋義晃会長)では、4回目となる草刈り作業を32名が参加して行った。コロナ禍が益々悪化している状況で、徐々に地区民が集合する場となり、作業開始前には各団体連絡等をする場面もあった。軽く作業準備体操を行ってから、班ごとに幹線道路沿いの草刈り行い、最後は一同が集結してふれあい運動公園近くの土手の一部の草刈りを行って午前中で作業を終えた。

河川敷の草刈りを実施 -9区自治公民館-

9月5日の朝8時に9区自治公民館(熊谷武忠館長)では45名が参加して、葛丸川河川敷の大瀬川橋から松林寺橋の片側を今年2回目の草刈りを約1時間かけて実施した。

開始前の挨拶で熊谷館長より、「コロナ禍で現在公民館は使用中止となっており、残念ですが昨年に続いて今年も収穫感謝祭は開催中止の方向です」と報告があった。

大瀬川に関わる歌をCD化する

大瀬川に関わる歌は沢山あるが、今までその殆どがカセットテープに録音して保存してきたため、近年はテープの劣化やカセットデッキが少なくなり再生することが難しくなっていた。そこで、板垣公さんがアナログからデジタルに変換する機器を使い、今回は「葛丸讃歌」「やまなし讃歌」「たろし滝讃歌」「大瀬川讃歌」の4曲をCD化した。

この4曲の作詞はいずれも板垣寛さんで、作曲は「葛丸讃歌」が佐藤司美子さん、「やまなし讃歌」と「たろし滝讃歌」は谷川賢作さん。佐藤司美子さんは石鳥谷の好地の出身でピアノ奏者や編曲などで活躍している。谷川賢作さんは、花北青雲高校の校歌の作詞をされた谷川俊太郎さんのご子息である。「大瀬川讃歌」の作曲は故人となられた阿部孝さんによるもの。「大瀬川讃歌」は平成13年の大瀬川公民館創立50周年記念事業の中で大瀬川にまつわる歌を公募した際と「大瀬川音頭」とともに採用された。「大瀬川音頭」は板垣忠夫さんが作詞、息子さんの板垣崇志さんが作曲で、CD化して地域の方々にも販売されており、地区民運動会や盆踊り敬老祭などの定番曲として親しまれている。

この音源のCD化により長期保存が可能になり、パソコン等で簡単にコピーも出来るようになった。

施設利用制限期間が26日まで延長(お知らせ)

花巻市では9月12日までとしていた新型コロナウイルス感染拡大による市関連施設の利用制限「レベル4」の運用期間を、9月26日まで延長することにした。

みつくら

令和 3年 9月15日 第346号
発行 大瀬川活性化会議
編集 「みつくら」編集委員会
花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
大瀬川振興センター 電話45-6472

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

「ブルリの杜」からIBCが生中継

9月3日午後3時から、IBCラジオの生放送でブルリの杜が紹介された。対応したのはサービス管理責任者の鎌田今代さんと、最近設置したスノーブレン（みつくら340号参照）について詳しく話された。

代表の熊谷和彦さんによると「スノーブレンとは、知的障害者を魅了する感覚刺激空間をつくり出すため、リラックスしやすいように部屋を薄暗くし、色々な色彩を発する光ファイバーを利用して、入所者の心が癒やせる場所です」との事。それでもいまひとつ判らなかつたので「具体的には？」との問いに「例えば、ガラスの管や容器に特殊な液体を入れ、その液体の中を泡のように気泡を舞い上げて、舞い上がる時にかすかに筒や容器が振動したり、筒内の照明を変化させて様々な色彩に変化を感じる装置で、障がい者ばかりではなく、一般の方々も多く使われているものです」と話してくれた。

自閉症の方々とは時々パニックに襲われることがあり、そんなときにもスノーブレンで落ち着くことができるそうだ。スノーブレン導入のヒントは、熊谷和彦さんが一戸町の奥中山にある「県立児童館・いわて子どもの森」を訪れた際に、ブルリの杜にもあればとつくづく思ったのがきっかけだったという。スノーブレンの導入には、まず憩いの部屋がなければならぬと思ひ熊谷さんは、毎年のIBCラジオ・チャリティ・ミュージックソン募金活用に応募したところ、令和2年4月にスノーブレンの部屋となるログハウスキット（広さは4帖ぐらい）が贈呈され、さらに今年も応募したところ待望のスノーブレンが贈呈された。熊谷さんの話を聞いて障がい者も健常者も差別ない普通の暮らしを望んでいるその姿に心が揺さぶられた。

年々増えているイノシシ被害

何故か今年は畔にピンク色のテープを巡らしているのが多く見られる。話を聞いたところ、イノシシ被害を防止するためだと教えられた。年々被害が増大しており対策に苦慮して

いるとのこと。

花巻市でも電気牧柵へ補助を行なっているが、設置費用と管理（草をこまめに刈らないと漏電して効果減）と維持（毎年冬までには撤去）が大変なため、ピンク色のテープも効果があると代用しているが、イノシシも慣れたのかテープの下を潜って田んぼに侵入するため、網を回している場所も見受けられた。

被害に遭うと畔は掘り返された上に稲が無残にもなぎ倒され機械での刈り取りが出来ない。ましてイノシシが触れた稲は臭い匂いが付くため家畜用のわらとしても利用出来ず、草刈り機で刈って焼却するか、そのまま土に還すなどの手間のかかる処分が必要となってしまう。また、周囲2メートルの稲も出荷出来なくなってしまう、ただでさえ米価が安くなっているなかでは熊による農作物被害よりも事態は深刻だ。

これらのことを踏まえ花巻市でも現在被害地域と対策を検討している。

「大瀬川の居住と家号」を自費出版

菅原得之さんは、「大瀬川歴史探訪講座」の企画担当として大瀬川の歴史を探求してきたが、その収集した資料を基に「大瀬川の居住と家号」を8月31日までに40冊自費出版した。

この冊子はB5版80頁で、目次に家号が五十音順に並べられ居住年が記され、続いて居住年順に整えられて検索しやすくなっている。

この冊子には、記録に残る大瀬川最古田中家（937年・承平7年）から、最新の新しい西館家（2021年・令和3年）までの308戸が載っている。なお、この本には大瀬川から既に絶えてしまった家号122家も含まれている。

菅原さんに、今後の発刊予定は？とお聴きしたところ「製本機を買い、一日に3～5冊ずつ作っていますが、差し上げる方を目に浮かべて作るのも楽しいものです」と話していた。本を希望する方は差し上げるので、菅原さんまで電話との事。

大瀬川から呂抜けの記録見つかる（前編）

この程、紫波町図書館で「盛岡藩家老席日記『雑書』」を読んでいたなら、宝暦の大飢饉に、大瀬川から（伊達藩に？）呂抜け（むらぬけ・村抜け・夜逃げ）した記録を見つけた。その時期は、宝暦6年4月17日に1家族、同年11月10日、13日、15日、17日、18日、20日の6日間に9家族が大瀬川から御法度であった村抜けしていた。家老の日記には、宝暦6年4月29日の日付で「寺林通御代官所大瀬川村工藤長左右衛門知行所（知行侍）分。百姓左次郎23歳、はつ17歳、春8歳、母45歳。去る17日欠落（呂抜け）候旨、御代官末書にて御郡代之を訴ふ」とある。また、宝暦6年年11月26日付けの家老日記に「寺林通代官から大瀬川村欠落（村抜け）、11月10日、13日、15日、17日、18日、20日に、一、戸主太郎左衛門75歳、女房67歳、與兵衛18歳。一、戸主さる75歳、女房60歳、庄六38歳、女房（庄六の）34歳、はつ16歳、なつ6歳。一、戸主長十郎34歳

女房29歳、とら8歳。一、戸主五助20歳、女房ねね16歳、母45歳。一、戸主弥平治37歳、女房33歳、子千10歳、久七34歳。一、戸主喜兵衛51歳、女房43歳、久助14歳。一、戸主源十郎34歳、女房29歳、娘ゆき13歳、専太郎6歳。一、戸主市十郎26歳、女房18歳、弟末人22歳、母58歳、巳之助12歳。一、戸主長之助39歳、女房34歳、しゅん6歳、治郎4歳」と書かれてあり、この11月に9家族35人の名があった。（来月号へ続く）

訃報

畠中家（9区）の高橋清志さんは、8月17日に79才で亡くなられました。高橋さんは昭和37年に旧石鳥谷町職員採用され、生活福祉課長・総務課長そして合併前の平成15年からは収入役をなされました。高橋さんで思い出すのは、大瀬川の出来事を動画で残して下さいましたことでした。昭和53年の学童達の野活キャンプや、学芸会などの動画は今では貴重な映像で、大瀬川振興センターでは「映像で綴る大瀬川の記録」にも収録させて戴きました。また、毎年行なわれている行事などを撮影することで40年前の大瀬川の姿を映し出して下さいました。また、「大瀬川家族写真集」の編集では、撮影主任として「こんな思い出となる仕事は生涯の内、二度と無いだろうな」と話していたのを思い出します。これらは「広報・いしどりや」の編集に携わった賜物であったと思います。役場を退職してからは、大瀬川の各団体の役職を担い地区にも多くの功績を残しました。中でも、大澤竹次郎顕彰会の資料収集での功績は大きくて、長女の五井利恵子さんを伴って、大澤竹次郎が終生研究に勤しんだ大学（麻布獣医学大学）や、自宅を案内して多くの資料を得たのも高橋さんがおられたからで、ほんとうに残念でなりません。9区自治公民館長や農家組合長、下大瀬川美土里の会会長などでも多くの功績を残されました高橋さんに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

事務室

ブルリの杜の取材で熊谷京子（木ノ宮家）さんとお会いする機会があった。ブルリの杜の入所者に仕事を与えるために自宅脇の畑で夫婦で草刈りをしており、隣の畑には入所者たちが手がけている茄子が濃い紫色に輝いていた。お話をしていると、「障がい者に仕事を与えたい・障がい者自身にも社会の一員として働いているとの誇りを身に付けさせたい。」と言葉の端々からそんな想いがひしひしと伝わってきた。障がい者に接していない立場から「私達で何かお役に立てる？」と聞いたなら「お願い！頼みがあるの。障がい者に仕事を与えるために、アルミ缶潰し機を買ったがアルミ缶がないの。集めにも行けないし、何とかブルリの杜まで持ってきて欲しいの。みつくらに書いてくれない？」「わかった」と自宅に戻ったら出したばかりで1袋しかなかったが、少しばかりの（※つぶさない）アルミ缶をとりあえず運んだ。